心の花賞受賞作品（2001-2024 年）

心の花賞とは毎年１回、心の花の会員が未発表の作品２０首を応募し、選考委員の合議により決定するもので夏の全国大会で発表されます。

==========

２００１年　第１回　盗めざる宝石　小川真理子

一つくらゐ秘密があつた方がいい例へば夫に聞かせざる声

十二年磨きつづけし鉱石をわが声帯に忍ばせてをり

原石をひとりひとりに渡しゆく初日は［ｉ］といふ母音から

生徒の名覚えきるまへにそれぞれの声の硬度を覚えてしまふ

新しき黒板に映え如月の星座のやうな母音梯形*

五等星ほどの明るさ喉の闇震はすことなき無声子音は

夫とゐて日本語の星空となるわが口蓋のプラネタリウム

外国語学びはじむる楽しさは嘘を言ふのが下手になること

利き耳といふもあるらしそれぞれに首を傾け聴き取つてをり

原石をブリリアンカツトするやうに発音矯正重ねてゆくよ

このうへもなく輝くは抱擁韻ゆたかなる詩を読みあぐるとき

「声失くすよりも」と放射線(コバルト)浴び過ぎし渋沢孝輔詩人たりけり

夢にのみ逢へる人あり夢にこゑ伴ふすべを誰か教へよ

血肉と思ひこむなかれ推敲を重ぬるほどに糺さるる母語

春の日の手話のあやとり見てをればわが眼こそ癈ひたる如し

重さうな指輪連ぬる中年の生徒はみづから研ぐことをせず

心して磨りたるを筆にふふませる人よあなたが母でよかつた

現し身に宝石を仕舞ひて眠る鍵のすくなき一生送らむ

流れ星行き過ぎし空に研する瀕死の言語の音素のひびき

唇も白菊も焼かれむされどわが骨壺に光るものあれ

＊フランス語の母音一六個の調音点関係図

==========

２００２年　第２回　あるいは未来が　堀越貴乃

善坂の闇に白木連(はくれん)ただわれが諾えばことなき別れかも

人の部屋に夜半目覚めればじんじんと宇宙のような暗さ眩しさ

とりかえしつかざることをせずにゆく果てこそとりかえしつかざらん

辞書の上のりんごそのままそのままにきみはがんばれこのままここに

この町に帰りくる一人だつたかもしれない夜をこの町を去る

ふるさとは前にあるべし三十代眼前にしてより前方に

誰に話しかけるともなく大声で話しはじめる大家族なり

わが帰郷をわらつてよろこぶものたちにゆるされるなよわれのなかの俺

思いつきり荒れてみるのもよからん家族の茶碗すすぐ指先

会いすぎて重ねすぎたる記憶より最初のきみを取りださんとす

メールボックス閉じてパソコンの蓋閉じて目蓋閉じて今日を閉じたり

午後の日の傾く道を駅前のポストまで行く下着をつけて

線路の向こうわれを呼びすてる女友達おとなのかたちのおさなともだち

小さき町の大きく見ゆる否おおき町なり振りだしのわれにふるさと

味噌汁をこぼしただけがきつかけの涙しばらくとどまらざりき

ロックンロール族のリーダー十八歳いなかに帰ると言いしその後

ドアを開け「おやすみ」と言いドアを閉める人を見なかつたが明日も会いたい

閉じながら見えるものあり開かねば見えぬものあり今はみひらく

きみの町へきみには会わず行くときの車窓の麦の熟れゆくばかり

高く高く追いつめられたし追いつめたしあるいは前が上であるなら

==========

２００３年　第３回　東京は雨　東條尚子

それにしても人が多い

犬濡れて銀色になつて身をふるう　総ルビはむず痒いと思う

水系ごとに水のにおいは選ばれる十七番線にひかりをえらぶ

圧倒的多数になつてたどり着く意見だ意見だ雨の東京

一日中どんどん体ぶつかつて半分ガラスの電車の扉

羽化したい背中としたくない背中犇きあつて階段へ向かう

ぶつからない足を踏まない遮らない幾多の困難の中を歩めば

思い出ができる前から積み立てのアルバム貯金は毎月引かれた

中心から外へ忘れられるだろう東京近郊路線図の線

制服は透きとおりそうになつて立つそれはよその電車だと言う

乗りかえがまだよくわからない

回線の混乱のような音はして立ち止まつてはみずみずと聞く

構内放送何か言つてる拡声器の一つに水流のようなもの棲む

現在地はいつも赤くて赤信号置くようにして地図を離れる

帰つたら洗濯機まわそう洗濯量極少量に目盛りを合わせ

Ｓｕｉｃａの使い方を覚えた

ＩＣチップかざして都市に祝福を与える無言が入る出ていく

地下駅の電車が行つてしまつたあと何かわからぬゴォーつという音

東京駅抜けてしまうまで十五分誰かに時間を貸した気がする

駅にかかわる電車の直線次次となぜ帯文を思い出すのか

つり革につかまつて聞くラジオ局海岸線をカヴアーしている

月曜日は『ビックコミックスピリッツ』の発売日

君は買つたまんがを膝にひらく頃「東京は雨」を受信始める

階段を銀のてすりは欄干になるまでのぼつた　橋だつたのだ

==========

２００４年　　第４回　　野川のように　　中西由起子

ほととぎす声高く喚ぶしののめの首から下はまだ夢の中

一人分の抜け穴として見上げおり楡の木の間のまるい青空

水の音しずかに響くハケ道の水よりほかに触るるものなし

何に率かれて来しにあらねど泉あり祖父の齢の桜の木下

湧き上がる水が水面を破(わ)る力ボトルに詰める丸き背が見ゆ

かたばみの草かた靡く寺院跡　開きっぱなしのカナヘビの口

深々と展示ケースをのぞくときわが唇は尖るものらし

樹が鳴れば鳥囀れば近代が吾を呼びに来る声を飾りて

糸遊のゆらぐ野に伏す〝恋人〟を〝友〟と直した国木田独歩(どっぽ)のように

いちじくを半分もらいし夢にしてあかねさす恋ひと日残れり

頭頂の青き羽毛を逆立てて怒るわれこそ鵯に似るらん

切りたてのわが髪吹かれ上水の水底にもういない人たち

あらあらと武蔵野台地を領しゆく雨より重い溜め息を聞く

川になり帯になり細くゆるゆると男は女を絞めていたりき

斜交いに居るさびしさとやさしさの距離を縮めて会わんよ明日は

青桐の肌(はだえ)われより若く見ゆ　折々の夜を月がうるおす

恋うこころ縦にななめに詰め込んでわれのかばんはどんどん太る

懐に掻い込むように鳥の声蒐めていれば耳ひとつ殖ゆ

薄れつつ途切れてしまった足跡は流れの向こうにまた続くべし

うた唄う野川のように君は来る草の緑の起伏に沿って

==========

２００５年　　第５回

畿外を語る貴族のごとく　　屋良健一郎

無知こそが無傷の秘訣たる島に我は戦もアメリカ世(ゆ)も知らず

山形へ国費留学せし父の「ヤマト」と呼ぶは異国の名前

ＫＯＺＡの街を包む暴徒の焔見ゆ復帰前後を語る目の奥

沖縄尚学(おきしょう)に独立論者の大歓声　力道山を見るような目で

どれくらい食べれば傷を癒せるか「食べなさい、食べなさい」と迫る媼(おばー)の

足早に母は過ぎ行く具志頭(ぐしかみ)村立歴史民俗資料館戦争コーナー

唐・大和・アメリカ・大和　寝不足なカメレオンの眼に朝の陽は沁む

郷土史にふれることなき妹は渋谷ルックでクラブへ通う

スタバにて辺野古(へのこ)の話題にふとなりぬ畿外を語る貴族のごとく

座り込みに来た浜っ子と知り合った春、座らざる地元民われ

映画館まであるらしいこの島の持てるブラックホールの中に

頭上行く米軍ジェットのうるささにただウォークマンの音量を上ぐ

アンポさえ知らぬわれらの目合(まぐわ)いは基地の明かりを見下ろす丘で

「不感症かも」と言われた夜もある電光表示されるデシベル

島人(しまんちゅ)の女(ひと)は水着にならざれば観光客に見入る夏なり

戦没者追悼式の壇に立つ首相に向かう百のケータイ

沖縄県遺族連合のテントにはいつか絶滅する遺族たち

平和祈念公園内の店店に青の「島人」Ｔシャツ並ぶ

ひとひらの疑念も灰にする花火われらも祝う独立記念日

はがすべきかさぶた持たぬ我なれば掲げん若く明るき歌を

==========

２００６年　　第６回　　綺羅星に捧ぐ　　高山邦男

水槽の魚に餌をやり部屋を出る今日を演じるこころ探りつつ

扉閉ぢ鍵を廻せば部屋の中われが不在の時間が始まる

億劫な気持ちを抑へ一日の無事願ひ車体丁寧に拭く

都会では高所に広い空がある地上の狭き空われは見る

植物はしなやかに初夏を泳ぎ出す空を怖れる事あらざらん

信号の秩序に従ひゆるゆると連なる惰性ゆるく苛立つ

見上げれば巨大な文字の看板が迫り出し人の視線奪ひ合う

保育園、花屋、道行く人々の時間ゆ街の影に華やぐ

みなみ風夕餉の匂ひ運びゆくわれに行きたし未来の故郷

終日を同じ座席で過ごしをり車体操作の部品のやうに

二十三夜交差点まで客と来て県道以前の原を思へり

元基地は昭和の名を持つ公園に脳裏には消えぬ真夏の日差し

螢光のＶ字を背負ひ夜の闇に浮き沈む道路工事作業者

わが仕事この酔ひし人安全に送り届けて忘れられる事

逃亡の末の常夜かトンネルの最深部朝のない灯を浴びる

運転手と無職になりし年寄りが多く聴くらしラジオ深夜便

暖かい気持ち未来より感じたり今際のわれが過去思ひしか

太陽光雲のプールを零れ落ち煙雨の朝も明るくなりぬ

君の目に映るわれ目を背けたしこころの襞は湿り臭へり

清掃婦が欠伸する朝しろがねの光の視線に晒され歩く

==========

２００６年　　第６回　　風の手紙　　細溝洋子

巣を作る場所を定めし鬼蜘蛛のその昂(たかぶ)りの初めの一糸

再生の感覚というはいかほどかむずがゆからん蜥蜴隠るる

掃除機に吸いてしまいし黄の虫はナミテントウであったかどうか

かたつむり小さく突けば「やれやれ」と角を振りつつ殻に入りたり

アシナガバチ疑わず来て軒下の取り払われし巣をめぐりおり

そういえばフナが戻った川だった　橋に突き出ている竿の先

新しき地下鉄ホーム　白長須鯨の中に白線がある

「亀がいた」ひとりが言えば次々に亀の話を　雨の庭園

見たくない日も自らの顔を見てアメンボはくるりと回るのだろう

「系」という言葉正しく使う人、上までかけるシャツの貝ボタン

ささやかな苦言を言いてしばらくを黄金虫のごと光りていたる

質問と答えがふいに入れ替わる　きつねが角を曲って行った

私の方がきっと正しい　証明をしたがる栗鼠のしっぽをつかむ

鳥の群れいっせいに向きを変えるとき裏返さるる一枚の空

私には読めない楽譜しなやかに灰色のねこ塀を越えゆく

お節介して叱られてばかりいるスズメがきっとあの中にいる

秋になればトンボが浮かぶはずの宙(そら)、今すっきりと空(くう)が占めおり

飛ぶ不思議笑うふしぎを頒てずに鳩と私が影を重ねる

白き壁昇りてゆきし紋白蝶(もんしろ)は光の白に溶けてしまえり

風の手紙となりて飛びゆくツバメ見ゆ私に雨が近づいてくる

==========

２００７年　第７回　土管のように　藤島秀憲

生垣を低目低目に刈り込めば父から見ゆる空が広がる

刈られつつ父は白髪を手に乗せて蝶を飛ばせるごとくに放る

おもらしの後は黙禱するように壁に向かいてうなだれる父

朝顔市のニュースを見つつ甦る父の記憶が六十年前に

年齢差日に日に開いてゆく感じ父の歩幅に合わせて歩く

短命の家系にありて現在も記録更新中です父は

多数決とらずに竹を二人前とりて父との夕食とする

乱暴に、たとえば土管を持ち上げるように庭から父を抱き上ぐ

平坦に父の寝息がしておりぬ一夜痛みの和らぎてあれ

吃音の血をわが代で絶やすぞと言えば憎しみ父の目に浮く

風呂場にて裏返しして洗うなり父の下着という現実を

客観視できぬ近さに父がいて入れ歯外して嘗めはじめたり

眠りつつ時折笑い出す父は昭和を夢に見ているらしも

やわらかさ・色を確かめ流したり流し忘れていし父のもの

盲腸の術後のような顔をして「笑点」睨みつけおり父が

靴下の履き方を教えまた教え父と二人の八月六日

すいとんと今年は父の言わざれば冷麦を食う終戦記念日

切り株のごとき踵をざらざらと音させ父がトイレに立ちぬ

どろどろの濃き血液に両足が抜けなくなりて父と棲む家

亡き父といつかは詠まん　一人にて固めに炊きし飯を食いつつ

==========

２００７年　第７回　　龍を待つひと　　永田智子

眠るとき裡(うち)を流れる水分の何割が汝(な)へ傾(かし)ぐのだろう

ひとふさの髪ほどかれて湯に泳ぐ内包したる思いのままに

薬局の領収証にくるまれて銀の指輪が鈍くひかりぬ

生命の危険は無いが完治せぬ病に罹(かか)りいると言われつ

己が身の死したるのちの世のことを三十歳で思い初めたり

坂の街　空へと行ける階段の一つのような家を訪ねる

長崎に育ちしひとの声しずか語尾にサの付く訛りのありて

手をつなぐ恥ずかしさからこぼれだす昔話と月の明りと

最近ね赤ワインに溺れてみたいと思うの、比喩ではなくて

なにもないなにも見えない夢のなか残るひとつの望みをわれに

一枚の鱗のようなコンタクトレンズを嵌(は)めて外(と)へ泳ぎ出づ

海を捨てはじめて陸を歩みたる人魚の脚もかく痛むとや

君の見る夕陽に比してわれの見る夕陽は違う速度で沈む

伝えたき言葉を何度のみこめば黒き真珠になるのだろうか

病名を「龍待ち」と書く　天空に解き放ちたきものが多くて

復帰せし職場で唯一違うのは重い書類を持たされぬこと

気を失うごとく眠りにつきぬ疲労という語も浮ばぬうちに

月を見るひとの顔まで輝きてわれを照らせるものとなりたり

生かされる存在なれば貝も吾も冷たき水をゆっくりと飲む

震えいる指を鎖骨に添わせおりはじめに雨よここに降り来て

==========

２００８年　第８回　　アボカドの種　　東(あずま) 恵理

七年の育児日記に吾子は這い前歯ぬけおちランドセル背負(しよ)う

まぼろしのピカチューふるふる進化して春の小部屋に雷光を吐く

首細き長男なりし抱きよせれば喜びながら必死に逃げる

目鼻口われのパーツをひきついで不意に差しだすカエルの死骸

年下のおみなごに子はまた負けて銀紙でおる角のある鳥

駅を降りひとに背中のひとつずつあるさみしさに傘をひろげる

ことごとくわれを否定する母親の受話器をおけば吾子と目が合う

ひとつの席にわれという物おかれあり寒さもどりし春の雨の夜

灰色の石たえまなくおちてきてわれは知りたり心臓の位置

いろのない悲鳴の息をふきこんだ紙風船を子どもがついて

こんなときお母さんならぶたれたといえば息子は樫の木になる

鉄のくさり首にまかれてうなだれる犬と気づきておののきたりし

お母さんかわいそうだねと吾子いえば深夜ひそひそ泣きたるわれか

ゆっくりと日差し移ろいなにひとつ欠けてはならぬものを照らせり

気がつけば声を殺して泣くくせを吾子はもちたり吾子はもちたり

お母さんはちゃんとお前を愛せてるか排水溝にあわ追い詰めて

蜘蛛の巣の奥にくもの巣お母さんがあのとき飛べばお前はおらず

かたつむりの軽さに傾ぐ葉っぱありこの世はきっと、きっと優しい

アボカドの大いなる種とりだしてひとがひと生む不思議をおもう

手のひらに運命線のいりみだれ南向きたる窓ガラスふく

==========

２００９年　第９回　　春の形　　武藤義哉

雨雲と花粉と種子を混ぜ合わせ春とは風の工程なのだ

立ち止まり虹見上げればわたくしの背骨は虹の曲率を得る

黄の色が異界にきっと飽和して滲み出たのだ　菜の花畑

たんぽぽの綿毛を預かり青空はまたたんぽぽの配置を変える

新しい命のために小鳥らは命を奪う　うららかに春

草原があり風が吹き　もしそこに馬がいたなら完全だった

現実の世界のはずれに立っている岬の先の白い灯台

海峡には信号がありもう長く海には青で陸には赤だ

漆黒のピアノであるが春だけはうすもも色でいたいと思う

満月の澄み切った夜と朧の夜いずれがよいか　狂うとすれば

現在は常に傷つけられている時計の針の先の刃(やいば)に

太陽とともに走ってきた貨車が太陽をやり過ごして止まる

なめらかなバターの肌に書いたなら解ける気がする幾何の問題

この春も桜の花が咲きそろう版画を再び刷り増すように

焼きたてのフランスパンをかろやかに小脇にかかえ　あ、にわか雨

飛行船は四月の空に浮上した放浪ガスを充満させて

命という重荷もすっかり流れ去り春の渚のうすい貝殻

しゃぼん玉吹けばゆらりとふくらんで春の形はきっとこんなだ

心だけ遠くへ行ける乗り物だ若葉のなかを揺れるぶらんこ

後から柳の枝にやわらかく触れられたから　振り向いたのは

==========

２０１０年　第１０回

病院のマトリヨーシカ　　松岡秀明

清瀬とふ美しき名を持つまちに「病院通り」が一キロ続く

ホスピスへ長き回廊歩みをり製鉄所めく中央棟より

われの名と響きの似たる二十九の女がホスピスに入る午後四時

ホスピスへの入院希望を書く紙に誰の意志かを質(ただ)す欄あり

秒針を見つつ脈とる看護士の喉仏なき喉に昼の陽

死にちかき若き女を診るわれの腕に時計はいささかきつく

患者らの漕ぐ車椅子ゆつくりと森の方へと光をはこぶ

マトリヨーシカ、ベツドの上に置きしまま若き患者はしばらく不在

つぎつぎに病状を問ふ付添ひに答ふるわれは蛸の眼持つらむ

炎天に稲光して顔を上ぐベツドに凝(こご)る患者を逃れ

「死ぬことは怖くないけど、不安です」彼女は桃を食べながら言ふ

森の奥艀(はしけ)のやうな病棟に見舞ひの子らが吸ひ込まれゆく

カブトムシ獲りし師長は窓越しに患者へと見せ空へ放てり

「先生が持つてて…私が死んだあと」手も足もなき人形がある

病むひとは森を見詰むる　その頬に鯰の腹の白さ現はれ

罫線も活字も美しき赤なるは麻薬を処方するための紙

蛇(くちなは)の抜け殻がある芝の上に車椅子二つ乗り捨ててあり

薮枯らし刈られしままに枯れてをり病棟に草熅(くさいき)れさせ

夜の蝉にさめた光で応ふるは霊安室への電子道標

マトリヨーシカ分かちて終(つひ)に現はるる虚(うろ)をもたない小さき人形

==========

２０１１年　第１１回　　さくらあやふく　　山口明子

本箱が本を吐き出す部屋の中化粧水濃く瞬時ににほふ

家ゆがむ揺れに車にすがりつつ背中に守る五キロのいのち

瓦落ち土塀のくずれたるままにひろがる風の不気味に無音

帰り来し夫の背中に触れむとす三月十一日のゆふぐれ

みちのくに灯の消えし夕　食料を雪に冷やせる夫の手見つむ

使ふ時来たかと夫の持ち出せるウエディングキャンドル余震に揺るる

停電の凍れる闇を震はせる音の兆しにいくたびも醒む

停電と余震続く夜　子は不意に鉄砲水のごとく泣き出す

自転車で食料を探しに行く夫の背に降りかかる刃(は)の如き雨

壊滅と聞く大槌に妻と子を迎へに行くといふ人の笑み

停電後の画面より伸ぶ　くろぐろと怒れる海の長き圧力

歌ひつつ子らと歩きし海の町　がれきにしづみ重機行き交ふ

押し上げし波のかたちをとどめつつ錆たり屋根の上の車は

カーナビは知人の宅を不意に告ぐ　がれきのみなる道走るとき

旅館よりひと月通ひまた去りし少女のその後問はずにおもふ

倒れたるさくら古木の梢よりけぶれるごとく萌えいづるもの

北を指す針セシウムに狂ふ春さくらあやふく光りつつ咲く

放射能の雨降りつづく東北にみのる果実のあをき沈黙

セシウムの風きれぎれに光る午後　砂いぢりする幼き手あり

大地震、大津波過ぎしみちのくにしづけくみつる苦しみの嵩

==========

２０１２年　第１２回　　藤棚の下　　山本陽子

子が靴を履きかふる間を我は立つほそき実揺るる藤棚の下

一日を子に付き添へぬわたくしは昇降口に手を振り別る

踊り場を折れて見えなくなりぬる子てとちとてとと足音も消ゆ

ミドリガメ二匹イシガメ一匹にぢやあねと言つて校門を出づ

三年前。校長室には七人の「対応チーム」が待つて居た。

学校に行き着かぬ子の手をとりて登校せむと約束しにき

ＡＤ（注意欠陥）／ＨＤ（多動）の例と〈通常〉の限界なるを一気に言はる

八人の花一匁われひとり「この子がほしい」の反対を聴く

第八章ひらけば夙に鮮鮮し日日に読み来し学校教育法（がくけうはふ）なれど

「わかたけ教室」は隣の隣の町にある情緒障害学級。半年前、週一度の通級を開始した。

情緒とは詩歌の言葉にあらずしてＳｐｅｃｉａｌ（特別）　Ｎｅｅｄｓ（支援）

Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ（教育）はあり

グワンバツテキタノデスヨと言はれ居り我がえれふあんと・じよーくの日日を

国語でも算数でもなく〈人間の勉強〉をする　教科書は無い

学校のはしごをさせて尾山台ハツピーロードを一人で歩く

練習に参加できないまま運動会まであと一週間。出張、やめやうか。

教室の窓に子の見ゆわたくしが見上げて居ると心付くまでを

札幌の切符はゆづり組体操一人技、二人技温習(さら)ふ宵宵

もう赤きプチトマトの実今日もまた体操服は汗に汚れず

眠るふりしながら眠りゆけるわがｄｒｅａｍ　ｍａｋｅｒ，ｈｅａｒｔ

ｂｒｅａｋｅｒ

＊　　＊　　＊

ぽんぽんと花火は上がり水筒の麦茶に氷多めに足して

今日だけは脱走禁止　亀池に二重にかかる緑のネツト

子の名まへ鋭き声に呼ばれ居りたなびくやうに子はうごき出づ

一人技、二人技あはれ三人技　体操服に砂の付きゆく

==========

２０１３年　第１３回　　水のくれなゐ　　岸並千珠子

肉感を拾はぬあをの襞重ねまだおぼろげなる水彩の鰐

いきものは色を濃くして絵は褪せよささめきやまぬはつ夏の日に

俯瞰図はサイコロの●(イチ)どこにでもころがりさうな画室にひとり

筆洗の天井に映す水跳ねてその魚(うを)はわたし　見ぬふりしたり

編集者の失恋話のあはあはとわが空腹はフロアに満ちぬ

浅緋(うすきひ)の姿態にありしが書店にて三ヶ月後の追熟をなす

彼を得し彼女のよろこび思ふとき挿絵は軋むこの結末の

スカートが尾ひれに変はる筆圧に不安顔なる素描の少女

去年(こぞ)描きし横顔はいまだ口すぼめ薬局にをりぬひとつ歳とり

君のゐぬ椅子にもたれて画廊(ギャラリー)の雲に降る雨、日に照る光

高すぎも低すぎもせぬけふのわれ君の画風に吹かれてゆかむ

ねむくなる夕映えのカフエ折衷案入れたるカバンに水の音せり

まだ知らぬ記憶塗りつつゆびさきは画紙の水際(みぎは)にゆがみはじめる

重弁花の線に迷ひてトレースの反転すれば裏返る部屋

風蘭をまとふをんなとすれちがふ画紙より逃げて影と遊べり

水無月の雨後は銀朱のにほひして会ひたさはチューブ絞りきるとき

黒ダリアつぼみ解きつつ痛からむ余白おし分け日日に寄り来る

くづれゆく君を知りたしゆるやかに水やれば育ちゆく水彩紙

保護色にモチーフを待つ深海のひとりでなければなにもできない

翼もつ鰐のデイテール絵筆にて水のくれなゐ括りてゆけば

==========

２０１４年　第１４回　　ビバラビダ　　佐久間得幸

一片の雲の湧きたつ隙もなくアンダルシアの空はただ青

強烈な夏の日差しを跳ね返し山の斜面の白きプエブロ

世の中の悲哀をすべて背にのせてフリヒリアナの道を行くロバ

セルベッサ！バルで地元の男らの姿を真似てビールを頼む

一本の煙草燃え尽き旅人のもてあましたる時間の長さ

コルドバの狭き路地には花々の香りたちこめ神のいる国

赤き城アルハンブラの片隅で動いていない時間と出会う

なんとなくいつもふらりと寄ってしまうスペイン広場の夕暮れの色

日が暮れて活気づきたるセビリアの人の早口より早くなる

また散歩？なじみの猫とすれ違いぶらぶらしている者同士なり

ダミ声でちょっと太めのドロレスが出すガスパチョがめちゃくちゃうまい

村でただ一つ鋭き線を持つイグレシアの屋根空へ刺さりぬ

ギターラの音が聞こえてくるようなさびれた路地のさびれた扉

早朝から村はそわそわしておりぬ宿の女将がフェイスタと言う

にんにくと油の匂いをふりまいて食堂ネカネの準備始まる

バス停の切符売場のセニョーラとバスが来るまで眺めている海

スペインが一点取ったに違いないバルから歓声あふれ出てくる

「フロール！」と女スリ師の集団に旅の途上で囲まれており

他事を考えていていいんだよ　だってほら今　街はシエスタ

青空に足を投げ出し旅人は木影のベンチで昼寝しており

==========

２０１５年　第１５回　　人形たちの島　　野原亜莉子

冬の日が部屋に伸びゐてあちこちに小さき島を作つてゐたり

人形はまだ見ぬ島に行きたくて行きたくてまた睫毛を伏せる

遠くまで行かうと思ふその時に鳥は翼をふいに失ふ

着色の途中で逃げる人形よ待つて脚がひとつ足りない

テーブルに白き手首が落ちてゐて光の方へ指を伸ばしぬ

一言も話せぬことのもどかしく冬の羽虫の音を憎めり

金髪がひたひの上に乱れたる人形が云ふ「君も寒いの？」

「あたしたち、何処にだつて行けるよね」百年前から寄り添ひながら

唇が僅かふるへて人形は生まるることの苦しさを云ふ

人形も裸体で生まれ一月の寒き陽射しに身を晒しをり

石膏の細かき粉は雪となり人形たちの汚(よご)しぬ

陽の翳る僅かの時間あらはるる人形の島を遠く恋ひをり

１㎜(ミリ)も動かぬままで人形は恋ふことのみを赦されてゐる

人形は胸が壊れるほど待てりたつた一日(ひとひ)をながき一日を

伝へたき想ひは伝へざるままに人形たちは微笑むばかり

午后の陽のひかりのなかに現れてまた消えてゆく人形の島

翼なく船もなければこの華奢な帽子を鳩に変へて飛ばさう

帆を上げて船よ進めまぼろしの人形たちの王国のため

人形の義眼がひとつ転がりて映つてゐたり青空と島

薄いレースのカーテン越しの冬の陽があはく浮かんで消えて、落日

==========

２０１５年　第１５回　　午後のカーテン　　武富純一

「ロッキー」を左右の耳に押し込んで拳振り上げ一日(ひとひ)始まる

マスキングテープに乗った色として後でゆっくりはがしてやろう

ぷつぷつとゼロカロリーの千の泡　知的障碍の弟の声

でかい犬みたいにじっと居間の隅ひかりを溜める午後のカーテン

捨てられし折鶴蘭の枯鉢の小さき緑に立ちどまりたり

空っぽの車庫の連なる家々に今日もとどまる黒きクラウン

晩春の蛍池（ほたるがいけ）の北町のフロントガラスのゴビの風たち

真っ直ぐに阪神電車は淀川を越えて父母、弟の町

極太のＴのごとくに物干しの紺の稽古着うでを伸ばせり

商店街出る人々に被さりし影上半分たちまちに消ゆ

シャッターに貼らるる閉店挨拶は「ございま…」あたりで反り返りたり

おばさんのやさしい餌に寄る群れに少し遅れて野良のシャム猫

かさかさと音のしそうな父母へぽつりぽつりと明日は雨らし

ひげ剃りの跡の濃くなる弟のなかをゆっくりローカル列車

うつうつと悩み育てし歳月の母の背中が捜しものする

鉄棒の鉄のにおいとまいちゃんの「なんでおとうとあほになったん？」

ごみ箱に敷こうと開くレジ袋なかに小さき玉ねぎの皮

いじめられ泣く弟を遠くより見ていただけの兄でありしよ

往復とならずとどまる二、三台深夜の駅の自転車置き場

繰りかえす同じ話にこれからもずっと頷き続けてゆこう

==========

２０１６年　第16回　　開けば入る　　梅原ひろみ

夕暮れの桜並木に風吹きて思惟の花びら散るひとところ

口吸ひの絵を見てひとり帰る道小川の岸に暗き穴ある

山の端にほの白く咲く花のごと点りてをらむ過ぎたる恋の

肉叢(ししむら)を持てあますほどの豊穣のぶら下がれる潜(くぐ)りて来たり

西洞院塩小路角にドアありて開けば入る求職のため

階段を駆け降りるとき踊り場にすれ違ひたり老いたる我と

開ききるぜんまいの葉の揺れてをり戻るつもりで置いて来し地図

うすべにの鋏かざして沢蟹の迷ひ出で金地院(こんちゐん)前

久々に会ひたる人のポイとよこすちあきなおみのムード歌謡集

あなたなら「泣くの歩くの死んぢやうの」歩き過ぎなり付け根が痛い

鈴虫の喰ひたる茄子のふがふがのやうなり味気なき君の声

熱帯を呑み温(ぬく)きかたまりをもはりもはりと身に収めたし

もう会はぬ人増えてゆく花の咲くゴブラン織りのカーテンを架け

産まざるは割に合はぬと言ひしころ「損得でモノを言ふ」と言はれき

欲しかつたのかと聞くならずつと欲しかつた子供ほろほろほつれて歩く

日曜日避けて観に行くモネ展の睡蓮の浮く水際に立つ

永興寺(やうこうじ)の夕べの鐘の流れ来ぬ水面にひとつ口ひらきたり

両脚を揃へて浮かせ羽ばたけば白き翼を人は見るのみ

役立たぬ者とふも役、こぽこぽと音立てて飲む夏の焙じ茶

ほの白き雄花揺らして風わたり栗の大木匂ひ立ちたり

==========

２０１７年　第17回　　夏のファイル　　大谷ゆかり

封書を手に小走りすればはつ夏の朝の風が軽くて白い

幾度も跳びあがる子の指のさき青きもみじが時折さやぐ

六月に生まれたわれにあたたかし傘を落ちくる雫の匂い

うたぶくろもつ蛙たち歌の輪の弾み月夜の田んぼも弾む

少年の命の位置を高くして夏の振子となれるブランコ

ベンチにも百日紅にも影が伸ぶかげはひかりの残す足跡

早口なはばたき方の紋白蝶　一羽のすずめ首をかしげる

菓子折の青きしおりの〈風そよぐならの小川〉に心もそよぐ

イモウトノプッチンプリンヲタベタノネあの日机の角が見ていた

前髪に鋏そろりと入れている夕べ世界は五ミリで変わる

ウエリントン眼鏡をたたみ枕辺の淡きともしび分かち合いたり

白っぽいローランサンの色調の夢をあなたとくぐりぬけゆく

夏花壇に水そそぎつつ人のいぬ島へあかるく降る雨思う

珈琲の氷に銀のさじ触れてからりからりと晴れゆくわたし

約束を風やひかりと交わすたび蜻蛉の胸はかたくふくらむ

夕立に濡れて光れるひざがしら鉄砲百合の的となりたり

運命をものともせずに蝉が鳴く夏は巨大な一本の樹だ

きらきらの長さ測らん川沿いの小道に一歩一歩を刻む

この夏の圧縮ファイルを沢蟹が未来へ運ぶ背中にのせて

砂浜へきゃらめる落ちて永遠につづく広さをきゃらめる眠る

==========

２０１８年　第18回　　手をあててみる　　笹本 碧

月面より呼ばるる心地手術室八に入ったはずの吾だが

月面に居たのは吾のほうだったぼんやりぼんやり地上へ戻る

看護師の吹き出したちが行き交いぬ血圧体温酸素飽和度

地上から七十センチを運ばれる薄目で廊下の灯りを追いつつ

両親が両脇に居てくれることこんなにも親不孝な幸(しあわせ)

点滴機かぽわんかぽわん働いてがんセンターの夜回りゆく

水分子しみこんでくる飲水を許可されこくんと飲み込む朝に

お隣にサンドラさんが入院し英語まじりの午後が広がる

三日目に歩行訓練始まりぬまるで海から上がったクラゲ

看護助手早川さんは同い年母でもある手がきびきび動く

残された左の側の卵巣に手をあててみる浴衣の上から

日のあたるロビーに切らさず置かれあり医療用ウィッグのパンフレットは

緩和ケアチームの林先生に言われる「薬も味方ですよ」と

春一番吹きしニュースを聞きながら初めて飲み込むオキシコンチン

病棟を三周散歩する間夕日は二センチ動いていたり

雪の朝センター一階奥深く放射線科へ診療にゆく

放射線治療室Ａに横たわるＢＧＭは槙原敬之

うすみどりの満月そそぐ駐車場ここから帰れる人々のため

回診の声が近づく　背を伸ばし闘うための熱をはかりぬ

あの青い車は今日も同じ位置同じ向きにて停まっておりぬ

==========

２０１８年　第18回　　紙吹雪　　鈴木陽美

はつ夏の風は指揮者かこの森の千の楽器が一気にひびく

鉛筆の先から紐をだすようにト音記号を空に書きたし

日の陰る岸辺に虚子の句碑のあり「鴨」は読めたが「嘴（はし）」の読めざり

庭園に木々は緑の息をして夫に母なき母の日がくる

切り株の年輪数えるさびしさの人より亀より長生きする木

八重咲きの花の丸みのほろほろと木香薔薇はフェンスをこえて

いっぺんに山折り谷折りするように旅の自転車たたまれてゆく

役職をひとつ手放し夫の貌うつむくうつむく衝羽根空木

ワイヤレスイヤホン耳にのぞかせて教祖めきたる顔をするひと

振り向けばぴくりと動いていたような夕べの売り場の靴の恐ろし

泡を手に受けて洗えりいつからか固い「石鹸」使わずなりぬ

腹みせて猫の眠れる真昼間白砂(はくしゃ) のような退屈な空

ガーベラの赤を花瓶に差しておく根も葉ももたぬ実体として

ほどいては結ぶリボンのおしゃべりに茉莉花茶(ジャスミンティー)の二杯目注ぐ

風がまず気配のようにやってくるホームに夫はまた目をそらす

リフレックス一錠飲むより手を繋ぐことがあるいは効くかもしれず

国境のごとき磁石の境目に弥次郎兵衛ならゆらゆら立つか

カーテンを開けろと猫が呼んでおり夜がしだいに消えてゆく空

うす赤きお菓子に似ている蕾つけ朝の日差しを受けるカルミア

水槽に紙吹雪(コンフェッティ)のような泡たたせて魚(うお)よ身をひるがえせ

==========

２０１９年　第19回　　マリーゴールド　　清水あかね

封印を解かれた夏の朝空にたちまち高まる青の濃度は

樹もわれも見えない光に照らされて八月のかげ舗道にきざむ

朝顔は紫紺のあかりひと夏を灯っては消え消えては灯る

逢いたくて逢いたくなかったひとと逢う火星が地球に近づいた夏

よく冷えた蓮葉茶（ロータスティー）の香ばしさ懐かしいような違和感のような

ヌクマムにまみれきらめく夏野菜わたしの知らない夏がいくつも

かつて煙草をもみ消していた指先を見ているいまだほそき指先

愛というブラックホールを怖れいき三日月型のピアスをはめて

漆絵のかわいた池に蓮花（ロータス）は南国の紅（こう）きっぱりひらく

駅ビルの昼の照明ゆらゆらとグラスに氷溺れさせてる

ぎこちなく会話とぎれてオーダーはチェーとコーヒー、バーバーバー

死ののちはさておき今は君といてぴかぴかひかる朱鷺色の雲

ラベンダー色の雨傘なくしものしやすい手から離さぬように

指先が肩にかすかにふれているエレベーターの地上に着くまで

ほんとうの気持ちを今日は明かさずにやわらかな白のフレンチスリーブ

まぶしくて目ぶた閉じればいつまでも点滅している青い太陽

おそ夏の夜空を低くさ迷えるマリーゴールド色の火星よ

近づいたり離れたりするＥメールの会話も地球と火星の距離も

対幻想とう言葉おもえりこの夜も星は涼しく軌道をめぐる

遠花火欠けて樹上にあがりおり夏の終わりの小雨のなかに

==========

２０２０年　第20回　　高野　経塚朋子

カーブにてレール軋ます高野線学文路（かむろ）駅にてしばし停車す

トンネルをぬければ秋暮　下古沢（しもこさわ）に降りる青年スマホを灯す

闇の山のぼる奥の院ゆきバスの乗客四人さいごは一人

千手院橋「数珠屋四郎兵衛」灯りゐてひとのかげなし夜の風とほる

大広間白壁に向きひとりたうぶ精進料理まづ胡麻豆腐

足をつかみひきこまむとする冥き水　布団を壁に寄せ眠りたりづかう

両の手をすりあはせよと若き僧わが左手に塗香（ずかう）を置きぬ

子の知らざりし匂のひとつ　てのひらを膝にひらきて塗香にほはす

勤行のこゑひくく和し灯明のひとつ激しくゆるる朝冷え

わが問ひにわが名をよびて答へたり木蘭色（もくらんじき）の法衣のこゑ

仏舎利は米粒ほどとぞパタンより来りて拡大鏡にかがやく

朝鳥のこゑにみあげる千年の杉の木末が朝日に融ける

奥之院弘法大師御廟にて人と離れて蝋燭灯す

中の橋にたばね売らるる高野槙つやめくほそ葉の風の傷あと

目をふせて母はよりそふ子を見をり宝来飾紙(ほうらいかざりかみ)の白ねずみ

なき子の部屋なき父の部屋母の部屋　日(にち)にちあしたのひかりを入れる

二百五十日供へつづけたる高野槙ひとつづつ葉を落とし痩せたり

風吹けば手首に纏ける金剛線五色(しき)の紐が守りくるるとぞ

あれはなに　芽吹きはじめた菖蒲田をゆける翼の赤煉瓦色

おかげさまで生きております。お大師さま宛の葉書の青葉のひかり

==========

２０２１年　第21回　　キキはほうきと　　倉石理恵

アーモンドの花咲くころに届け出は出されたるらし子は妻となる

「ハクション」に似ていると思う子の苗字宅配便に書かれて届く

半日の時差ある町に子の夫は住みおり時折スマホに会えり

アメリカ永住権(グリーンカード)取得できたと唐突に言われわたしも緊急事態

ワクチンの接種履歴を確かめむ母子の描かるる手帳を広ぐ

アメリカで暮らすためにと子は打ちぬ何のワクチンかは知らねども

やすやすと傘を骨抜きにする風がわが感情を揺さぶっている

はぐれたる鳥が飛ぶよう日に一便運航さるるアトランタ行き

日本を発つ日のことを子もわれも触れず過ごしぬ　小寒来たり

贄のごとく子を差し出すかコロナウィルスにて日に三千人が死にゆく国へ

変異種の感染者じわりじわり増ゆ旅行へ行かず外食もせず

夕食を思う存分作りたる子が急かしおり母の声にて

買い物へ行けば喧嘩になりそうで三度誘われ四度断る

何もかも一人で決めてと子を責めて干潟の魚のように呼吸す

夜ごと縫う布のマスクの縫い足らずたったひとつの口塞がむと

異形なることこそよけれ野に探すシロツメクサの四つ葉五つ葉

PCR 検査陰性証明書スマホに届きもう発つばかり

保安検査場前で「お手紙」渡されて霧雨のなか立つシラカンバ

放送のたびに子と見しジブリ映画キキはほうきと共に旅立つ

出国のゲートの先は冬銀河わたしは何を持たせたりしか

==========

２０２２年　第22回　　セカンドフラッシュ　　水口奈津子

聖五月の空の広さよ泳がない真鯉緋鯉のねむる闇あり

プラタナスの並木をぬけるシスレーの筆触のような幹を叩いて

明恵上人の右耳ゴッホの左耳ハクモクレンは散りはじめたり

とうめいな立方体に満つる声まひるみどりの受話器ははずれ

湧き水のそこのみ白く盛り上がり女子学生のおしゃべりつづく

何もなきひと日のおわりに肉を焼く朝倉山椒をピリリと利かせ

ぽっぽんとジャムの蓋あき飛び出せる朝のニュースは開戦を告ぐ

ＩＨコンロにお湯は煮えたぎる青き炎を見せぬ明け暮れ

〈妻〉と〈麦〉読み違えたりああ麦になりたし未明の雨に洗われ

戦地なら銃の重さか七キロの米をかかえてよろけておりぬ

使い捨て手袋Ｌはすっぽりと抜け落ちわれは過去を失う

電話越しの声はしずかに症状をたずねたり木曜に予約を入れる

求めらるることばさがして応えこし歳月みずの淡さをもてり

蓋をとり煮つめておりぬめんどうな記憶に琥珀の艶生れるまで

耳鳴りの音たずねられさわさわと竹林を渡る風と答える

しまい湯に首まで浸かれば出る声をあの日の母の声と聴きおり

さし入れる匙の軽さにはつ夏のひかりをからめ蜜掬いたり

エビデンスなしと言いたる友の声雑踏の中に浮かぶを消しぬ

ダージリンセカンドフラッシュ梅雨入りの体内時計を整えてゆく

あおむけのわが顔めがけ電灯の紐は垂れおりまわりづつける

==========

２０２３年　第23回　　右のおなかがいたいねえ　久永草太

我の死を押しつけるごと丸をする臓器提供意思表示欄

わたくしの肝臓なんて欲しいのか焼酎お湯割するするすする

ら抜きにて命懸けれるなどという人に割られてゆく落花生

ならいっそやくざな人の心臓になってうなぎをつついてみたし

酒飲むと右のおなかが痛いねえ痛いねえって笑いあってた

膵炎のページめくれば恋心みたいに赤く染まる膵臓

三つ折りにＴシャツ畳む元気なし半分、半分、我も半分

一本の樹に喩えればフクロウの棲める洞穴あたりが痛い

貝殻を匙にアサリの汁掬う弥生時代の親父もきっと

解け落ちるつららのような不意をつき父母に告げたり我の断酒を

医者に行けと母が言うなり酒飲んでいいと言われるかもしれんぞと

身離れのよさ褒められているカレイどんな気持ちで煮汁に沈む

贈られるように鳥の青黒き羽落ちている朝の玄関

唐突に誘いし遠出に現れるスーツ姿をずるいと思う

温泉に裸体、裸体よ心臓を同じ時代に沈めて我ら

露天湯に光の差せば湯面に輝く垢だらけだなこのお湯

住民票移し終えたる君の目に我は故郷の古墳のひとつ

膵臓の痛みの話に花の咲き無駄な部分のなきこの体

でも病院行けよと言われまあいつかきっとそのうちまた会おうよね

エコーゼリー塗ったくられて我が腹に来世うなぎの予感まとわる

==========

２０２４年　第24回　極秘　服部崇

戦闘機の飛びゆく音に目を覚まし静かになれば髭を剃る朝

組織のデータをここに貼り付けることはできません。今は別れの

種なしのピオーネを食むいつまでもあなたの罪を宥せずにゐる

かつては島の繁華街なりき銃声の止まざる午後を藪に入りゆく

流れきし遺体を弔ふための廟近くにエアープランツを掛く

この島のでこぼことした認識がジグソーパズルに括られた壁

数多あるなかにLove and Happinessと赤く書かれたランタンが浮く

力尽き空より落ちしランタンのひとつが枝にかかる木がある

大陸のサラミは何枚切りなのか中間線を越えて飛ぶ鳥

大抵の時間をひとり樹となりて立ちたる人のやうにはできぬ

この世から消えて無くなる日を思ふかもめが朝の体操をする

必要者(エッセンシャル)、不必要者(ノンエッセンシャル)に分けられて我はこの地に死ぬもよからむ

何日君再来の流れる墓に近づきぬ我が約束を果たさむとして

お互ひに背中を向けて立つ像の蛙を拭ふ土砂降りの雨

彼岸花枯れてしまへり片隅に石の蛙は動かずにゐる

鳰鳥の潜く極秘の紙されば断ちて細かくゴミ箱に捨つ

役に立つやうに聞こえず幾本か骨の折れたる折りたたみ傘

雨傘の遠き記憶を手掛かりに板橋(パンチャオ)駅の改札を出る

もう一度君と飲みたし透明なポットに菊の花を咲かせて

満月の夜は来にけり漕がずとも空を流されゆくだけの舟

==========

選考委員と応募総数

第１回　選考委員　佐佐木幸綱　石川不二子　伊藤一彦
宇都宮とよ　晋樹隆彦　谷岡亜紀　俵万智
応募総数　８８篇

第２回　選考委員　佐佐木幸綱　石川不二子　伊藤一彦
宇都宮とよ　晋樹隆彦　谷岡亜紀　俵万智
応募総数　８５篇

第３回　選考委員　佐佐木幸綱　石川不二子　伊藤一彦

宇都宮とよ　晋樹隆彦　谷岡亜紀　俵万智
応募総数　　７０篇

第４回　選考委員　佐佐木幸綱　大口玲子　黒岩剛仁
俵万智　西田郁人
応募総数　　７５篇

第５回　選考委員　佐佐木幸綱　小川真理子　黒岩剛仁
俵万智　西田郁人
応募総数　　７１篇

第６回　選考委員　佐佐木幸綱　小川真理子　黒岩剛仁
俵万智　西田郁人
応募総数　　６２篇

第７回　選考委員　佐佐木幸綱　小川真理子　黒岩剛仁
俵万智　西田郁人
応募総数　　８２篇

第８回　選考委員　佐佐木幸綱　小川真理子　黒岩剛仁
俵万智　西田郁人
応募総数　　１０４篇

第９回　選考委員　佐佐木幸綱　大野道夫　黒岩剛仁
住正代　俵万智
応募総数　　９６篇

第１０回　選考委員　佐佐木幸綱　大野道夫　黒岩剛仁
住正代　俵万智
応募総数　　９６篇

第１１回　選考委員　佐佐木幸綱　大野道夫　黒岩剛仁
住正代　俵万智
応募総数　　９６篇

第１２回　選考委員　佐佐木幸綱　大野道夫　黒岩剛仁

住正代　俵万智
応募総数　　１０４篇

第１３回　選考委員　　佐佐木幸綱　大野道夫　奥田亡羊
住正代　俵万智
応募総数　　１１０篇

第１４回　選考委員　佐佐木幸綱　大野道夫　奥田亡羊
住正代　俵万智
応募総数　１０４篇

第１５回　選考委員　佐佐木幸綱　大野道夫　奥田亡羊
住正代　俵万智
応募総数　１０４篇

第１６回　選考委員　佐佐木幸綱　大野道夫　奥田亡羊
駒田晶子　俵万智
応募総数　１１８篇

第１７回　選考委員　佐佐木幸綱　大野道夫　奥田亡羊
駒田晶子　俵万智
応募総数　８０篇

第１８回　選考委員　佐佐木幸綱　奥田亡羊　駒田晶子
田中拓也　俵万智
応募総数　９１篇

第１９回　選考委員　佐佐木幸綱　奥田亡羊　駒田晶子
田中拓也　俵万智
応募総数　８２篇

第２０回　選考委員　佐佐木幸綱　奥田亡羊　駒田晶子
田中拓也　俵万智
応募総数　81篇

第２１回　選考委員　佐佐木幸綱　奥田亡羊　駒田晶子

田中拓也　俵万智
応募総数　８６篇

第２２回　選考委員　佐佐木幸綱　奥田亡羊　駒田晶子
田中拓也　俵万智
応募総数　７９篇

第２３回　選考委員　佐佐木幸綱　奥田亡羊　駒田晶子
田中拓也　俵万智
応募総数　７９篇

第２４回　選考委員　佐佐木幸綱　奥田亡羊　駒田晶子
田中拓也　俵万智
応募総数　８９篇